

接触媒質不要な探触子

ジャパンプロローブ リチウム電池など検査

ジャパンプロローブ（横浜市南区、小倉幸夫社長）は、グリセリンや水、油などの接触媒質が不要な超音波プロローブ（探触子）を開発し、販売を始めた。独自技術を用いた整合層により、乾いた状態での検査や計測が可能となる。橋梁やビル、電子部品といった工業用途に加え、腹部の超音波検査など医療業界にも訴求する。国内のほかタイやインドネシア、マレーシア、シンガポールなど東南アジアでも拡販する。

超音波プロローブ「乾」とする。消費税抜きの探（かんたん）は、価格は10万～15万円。超音波を通過しやすく、初年度4000万円の材料や厚さにこだわった整合層の開発により、接触媒質を不要やりチウムイオン電池



リチウム電池の検査にも活用できるため、破壊検査を実施する必要がない

（LIB）などを検査計測できる。橋梁やビル、発電所、石油・ガスタンク、配管に加え、水を嫌う自動車・電子部品など産業分野では幅広い用途を見込む。

れ目を入れることで、3次元曲面の検査にも対応する。道路やトンネルの検査の場合、工期短縮や省力化につながる。計測前に足場を組んで媒

質をハケで塗布する作業や、計測後の媒質を拭き取って足場を崩すといった工程が不要となる。飛行ロボット（ドローン）やロボットに搭載できるため、作業性も向上する。

注力市場に掲げる医療業界では、腹部や胸部などの超音波検査でゼリーなどの接触媒質の塗布が求められる。乾探を活用すれば、接触媒質が不要で塗布、拭き取りの一連作業を省略でき、検査時間の短縮が見込める。

接触媒質を用いるプロローブと比べて、接触媒質が不要なため環境負荷にも貢献できる。また製品をぬらしたり、汚したりすることによるリスクの軽減にもつながられる。